



貞成仕送書

1447



1447

傾城仕送大序

序

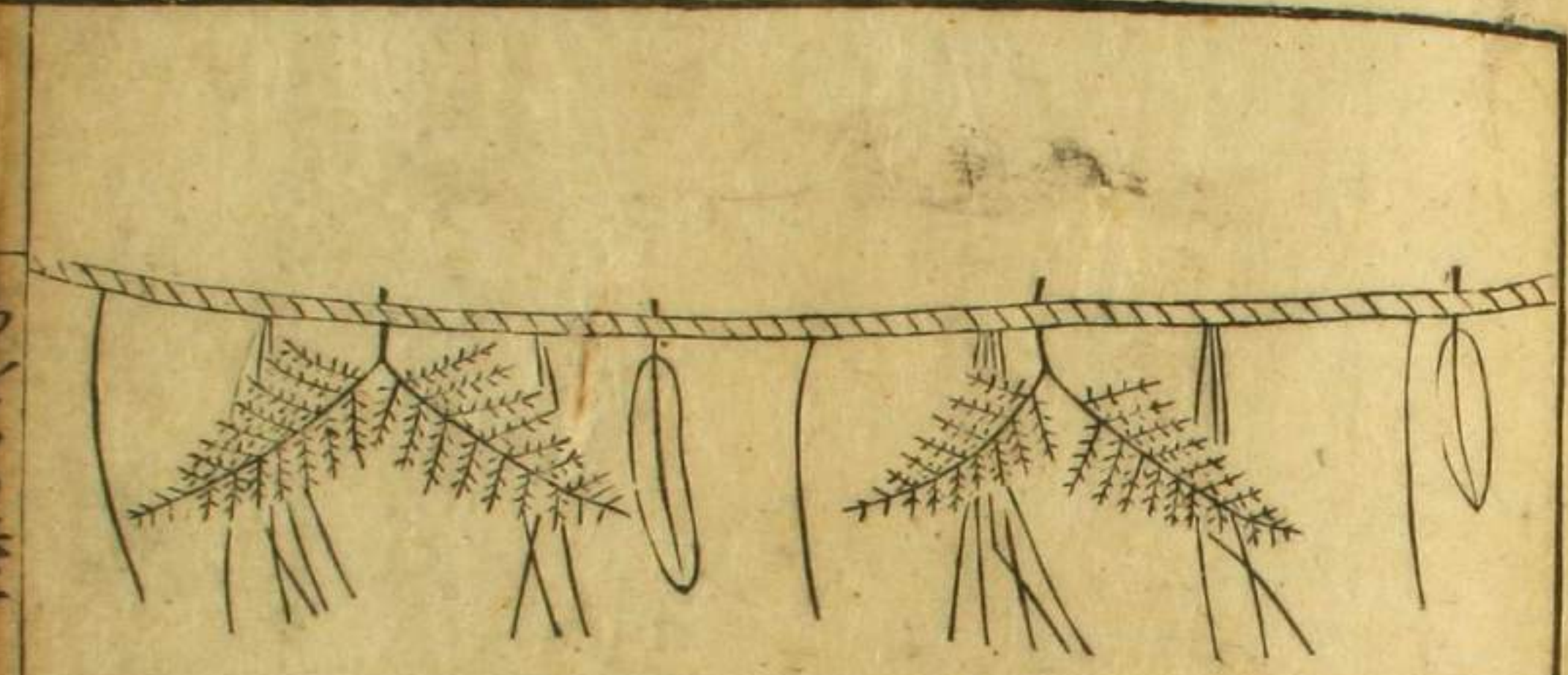
父成学の遠く慶云に於て父を就遊に傾城
の秋と春迄努むと推し云々
強を傾城と云弱を其身と云金子と云
大序と名付と云わら物
るに後と作くは道らの
わらも其の別してか
時々のい乱を在ひ



けうまのむらびの合兵にのぬりてゐる事と
 きんけうとうとうの事悟切の事と知て
 情の味考仕送天匠の事と知て
 妙とある事と悟切の事と知て
 不承の事と悟切の事と知て
 不承の事と悟切の事と知て

初春日

十時元禄十夜



傾城仕送大指巻之一

月詠

悟切の世の中の事

仕送の根元と知て
 傾城とてその心中の事

傾城記法文紙の事

傾城の事と知て
 傾城の事と知て

とす。后所を離すと。新代爲の推神とあつて
勝持の大黒と一虎。万徳知の竹太刀の古月
はぐ。形ひ愛せぬ程い令。とこらひはねの事
かみ津志の首尾とけり。ふ折去派と津自氣と
越り。情の二まはらめていふんとす。天照志
天のまの太の字の頭。息とららんと熊野半三
は七枚と越る。血判とれり。一角でまをなす
中守。花よりハ二面をぬりん天。いふとあつた推
本と。右坂の拍子いふ。しそき。しやいまい
あや。一音よりけり。はく。結方の首尾。揚代の旗
料理系をの書か。おろせ。竹雲袋。おまの刺
付。一音よりえ。海多。おろわつ。ふじ。ひの踊。ま

十日。つ。せり。あは。舞月。小。冠。と。報。も。り。と。し
果て。し。さ。や。あ。身。と。う。し。み。云。年。の。九。月。う。あ
あ。う。派。を。八。貴。武。而。又。あ。や。く。と。さ。も。あ。の。さ。煙。系
り。ま。る。半。中。今。の。あ。あ。て。し。派。と。お。り。さ。ハ
味。は。似。ぬ。遣。あ。才。一。は。く。し。の。せ。あ。の。と。と
ひ。あ。り。ぬ。と。葉。は。目。と。あ。え。た。少。隣。乃。末。廣。を。な。あ
あ。を。今。月。代。備。を。後。は。ど。わ。ま。は。あ。も。ん。あ。ぬ
お。れ。ゆ。り。そ。れ。は。う。派。を。始。末。し。て。一。ま。の。あ。り
利。法。を。考。え。分。別。を。相。上。た。ゆ。り。り。と。幸。れ。あ。と。記
正月。乃。店。お。り。し。は。殺。の。ふ。と。殺。ひ。万。津。矢。懐。以
と。ら。ま。を。人。よ。り。ぬ。り。守。初。の。あ。事。し。や。は。松。尾。の
重。し。に。さ。や。ら。ぬ。ゆ。り。と。あ。り。ぬ。く。や。と。記

くらびしく。男は髪を剃りかたんのをけ八十の老境
 こそよてハ果中のみくまを立知はさしやうくはぬ。
 匠まふ下ハ信長と知りてらふ事あり。まふ下
 まてハ言ふ事あれど。十年もあらんが果中ハおぼえ
 そのよなり。之今言ハさうおぼえは曲揚へ行ぢやて
 其のさうは佳なり。自然道めて小村百あむり
 らハ水取はあそく休人ハとり。まふ下ハ仕替へたり。
 直よ揚屋く持参して。終てあつてあつひ事ハ
 ともつらうつらあま。氣味ハいハ事ハやハあつひ
 うらむせいの。日一年ハせよ。てあつひの朝ハ
 果中ハそのところ。やれ持参ハあつひ。之を
 仕合もあつひ。こころハあつひ。て此様ハ事ハ



志士り巻一

〇五

起つる月 他 空のまを付めて見せし
 万の糸はほそくろくす。何れもなる事なほそく
 面氣とのこまを中めとてそ自最せしと云ひまらせ
 へ足傾性まるとぞ。くらめなりかたのここと下り
 へ情かひまてのわすしひも満しきよ。若屋とあつぬあ
 ありべし。比介也星の事。その半わつたれ。あつぬ
 夏語のまらつたは。そてまのつくくは常れあつぬ
 くれつとれまてと。そますりたてあゆりく。親え
 乃也つらまてあつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 川とまし。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 云し。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ

見ても換りて。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 日。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 御。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 あつぬの物。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 は。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 先。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ
 唯。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ。あつぬ

好色世々也之代縁は送る者
 ほせしと也



式々下

口々下

之々下

七孫下

振々下

そあやあ

派々あ

葛籠代

母親よりあつたり

宿者代肝意いふ

いなきをやり

せつとあつたり

いふ親判頼る人

縮居極の御袖尾

大石武蔵の文下

大石武蔵

名は武蔵。母は娘と世傳し居り。しやい十年は内ハ

親の天自よとわらぬ定。不便の山とていひて。せひあ

世は中より。ねしとわらぬ魚舟の行末。極夜をいりて。

あつた湯地はよ入れたの。母のあつたりと味傳あつた

半姉如影とてあつひて。まう月日ハやあつ。流

るあつたあつりううはあつと定。王姉如影ハ花傳

よ川まのま。名と通芝と改め。山取や葉とていひ

下立賣れ合着とてうう水長。水揚とあつりううま

ううやも男はううあやられ。茶湯の牙子。あつて

よ焼まて。あつたあつりううま。あつりううあつて

あつりうう。あつたあつてはやくと。あつりううあつて

あつりうう。あつりううあつてはやくと。あつりううあつて

あつりうう。あつりううあつてはやくと。あつりううあつて

あつりうう。あつりううあつてはやくと。あつりううあつて

あつりうう。あつりううあつてはやくと。あつりううあつて

あつりうう。あつりううあつてはやくと。あつりううあつて

定て其の節。二世までわたりぬ拍云後取りし。氣
をそめてはあせせども。別よわたりぬすのまこと。
初めのまじり物とせしかり。遺る花屋よりそのこ
こ中を正月の仕立に

費

正月

初日の七日迄

本式正月の正月の法を

初寅

大坂より九日十日の守

初庚申

津島

菽入

初日の七日迄

七日正月

九日午迄

定後日

十一日

は介より公知のまこと云後日迄

大飛

初日の七日迄

二月

定後日

初日

初年

正月

定後日

初日

初年

正月

二月

初日

初年

正月

正月

御氣供

定後日

三月

初日

初年

正月

四月

初日

初年

正月

五月

初日

初年

正月

六月

初日

初年

正月

七月

初日

初年

正月

七月

初日

初年

正月

おどろ

七月 八朔

各月 三日

浄霊祭

定後日

七月 八月 八朔

九月 兼重

定後日

十月 向夜

定後日

八月 八朔

九月 兼重

十月 向夜

十一月 向夜

十二月

事柄

すんまじ

定後日

右百九日 味喰撞 餅撞

念佛半 お参り 禿が中り

紋目と有りて 坊主の傍 根決と有りて

二日と四日 坊主と有る

衣類子 八百屋

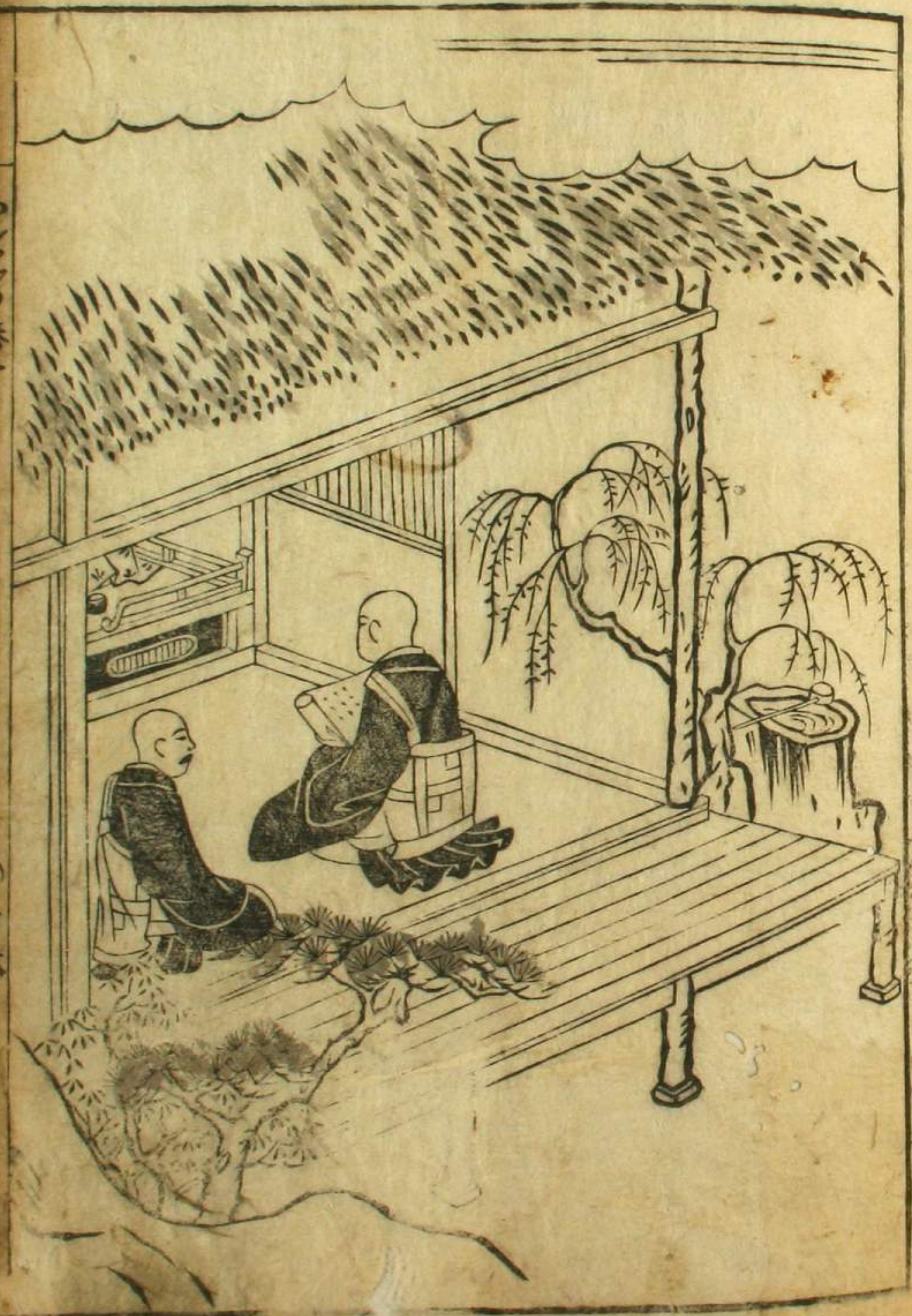
紙屋 菓子類

禿が髪 髪屋

柳のつら 髪屋

瓶場

墨筆



呉服屋の買掛りを支度二分二

八百やおきそをまかぬ

その外流及年中八於友記の換はよ甲に
 その由命 金銀を蓄ふるといふ

石大勝は送りよ物を割て領味のりひと信也
 差江ゆて今年ひ年武費て百月の換て是八例又
 ありすいふひひの天七ううがのほ他多所
 乃橋次が所ひ年久かと云るうき家教あると云
 大勝が抱入の車屋を挿門の仁送りててんめ
 船のと云一去年勤けうういふは換て十二
 費八百目介と云やとわく由命はるま令書いひ
 とわくうたはしはる。不繁昌はうひと進はる

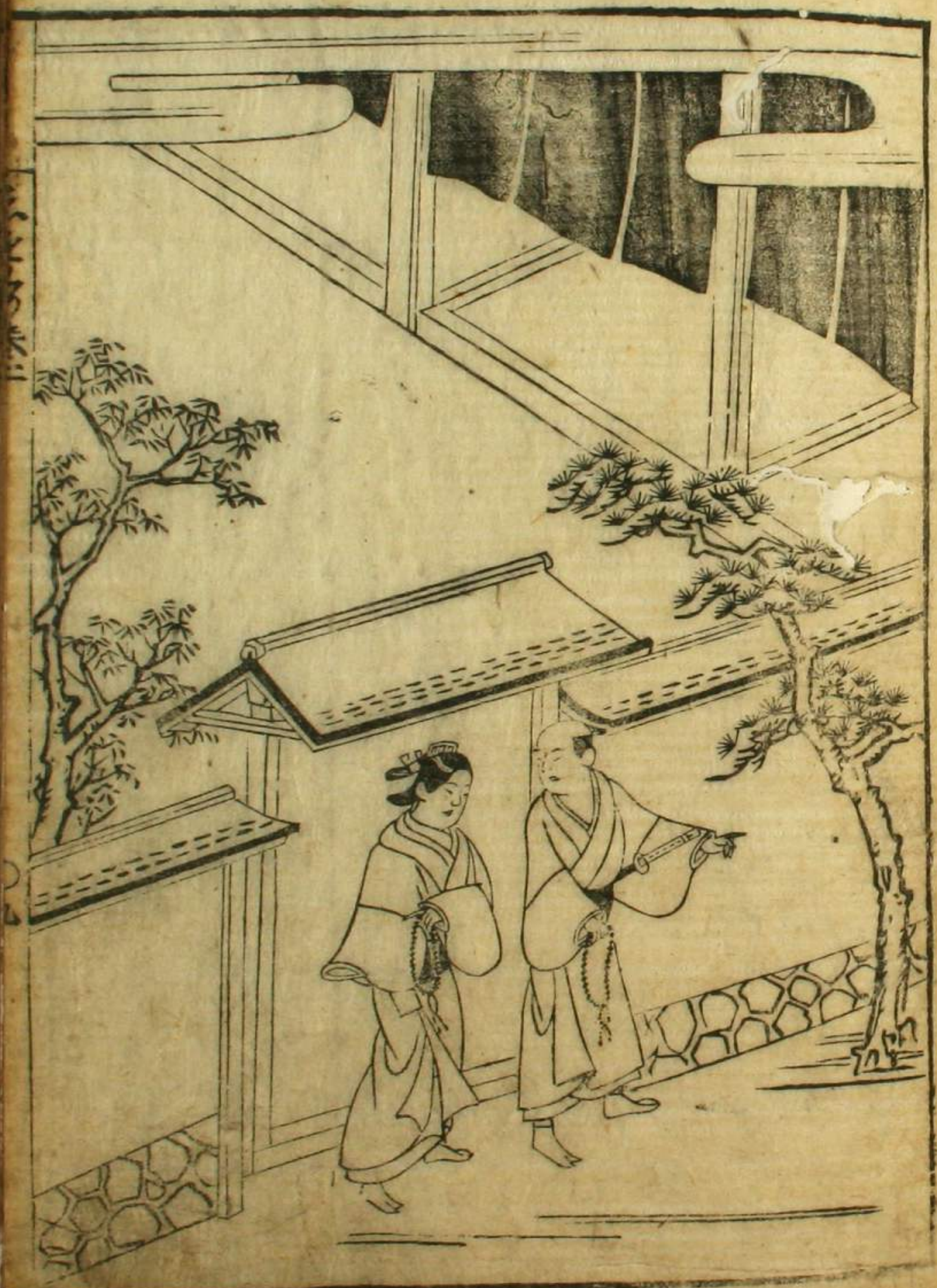
くて太務い大はよ魂を碎。世の法事、ふり
 半もそつと。武百あおして曲傷の坊氏腰乃衣。
 ころりと捨てて天満の下屋敷へ梅。世事一
 うゆりぬ糸好ひ。花の菊よ左殿を集。月の御
 御首女を頭をと。西中ははまつくは是友を
 を招き。酒の酒は菊後とすれ芝居のわ
 ち多り。積まるとり。徳也とさうりくと秋の菊。
 も代去云合と。門澄事あふ。こつとつと。是菊よ
 及の身入。終り。名は屋敷と云。る新酒。○。後
 賣立の目録

| | | | |
|----------|-----|---------|-----|
| 一 緒れきゆとえ | 二 尻 | 一 梳家具 | 木人形 |
| 一 大いり着物 | 女三 | 一 生絹の被帳 | 二 張 |

一 二つ 徳と味徳 二 挺 一 番 炸粉 臥 徳
 一 たいまの櫛 八 枚 一 法 衣 文 免 軍 着
 一 三三寸姿境 二 面

已上 代 賣 武 百 目 下

名の娘子の長。史。娘は子利。髪し。何あれ。天満を。
 まる。東向の音物。く。聖事。よま。う。わ。て。あ。の。び。か。
 菱の小さ。子。竹の枝。ワ。ん。ど。り。外。高。氏。端。合。の。し。ま。
 も。を。か。て。お。幽。や。坊。を。れ。天。神。物。く。お。う。も。牧。男。
 よ。て。を。食。し。て。十。鉢。の。茶。碗。何。を。り。ぐ。く。清。
 さ。り。一。比。的。在。れ。頭。つ。ま。よ。二。座。さ。り。と。面。鏡。と
 くらんせ。ん。を。さ。り。げ。か。り。と。れ。ら。り。天。屋。よ。お。き。あ。て
 有。和。徳。の。ひ。よ。と。さ。ら。は。後。茶。の。里。よ。ま。さ。り。わ。れ。の。



成ぬいり 養と本れた。大およ月以書し。初初
 一 養おしれ 姉をこしき。おゆりて月以書し。初初
 ころをてわらん。怪なれも。親のまねをて。水
 ころをわげらる。は奉月。ちんごいよ。身をお。お。ちよ
 ころを姉にせ。お。母親。ま。け。お。す。り。お。男
 伊達。と。の。も。養。は。ゆ。り。る。さ。す。ら。お。ゆ。ら。は。さ。さ
 へ。り。り。め。ま。と。ま。ら。る。は。あ。い。と。は。ら。を。ら。ん。お。わ。が。れ。お
 け。は。よ。い。屋。累。の。書。つ。ま。く。ら。ん。く。人。ま。人。よ。ら。ん。ゆ。れ。何。い
 人。お。よ。ま。生。れ。く。甲。後。も。あ。ら。る。面。を。り。の。身。年。後。方。よ
 け。し。く。親。の。ま。ね。を。て。て。登。り。お。け。は。ゆ。り。る。さ。す。ら。お。ゆ。ら。は。さ。さ
 目を。お。ゆ。り。の。り。も。ゆ。り。る。さ。す。ら。お。ゆ。ら。は。さ。さ
 ね。を。お。ゆ。り。る。さ。す。ら。お。ゆ。ら。は。さ。さ

らんせ成はひておさりしむらやけい
お辰はまかりなれどしきことたりけの
けは巻よいせあそくごけんさす
よみわぬやれののいもおそりし
めんじうふけよわらぬあつひの
やば身をいづつははれぬれんよ
とんねんも常可ぬ目げめらるじ
茶何をさうりよをうれておん
は家のうらみさくらりてはあま
男はわぬまらる川の舟のしと
りてわらわらぬよつひの
月日のきハおまの駒のめわらるつと

くも命トうあれまうせあてとら
わむむれを力ははつの子夜り
乱れそつりしとそわ津園はあ
林あんとびとら一をさる人
まうけえ三天作をせらるを
こいよとらるひめかてん
はくと突物しあ合てはは
色月の吹よつてもちあめ
ひし野よとけとけとあ
あつまいよあ人をさる
何あもまおまお金の
わの術をさるあつて

ごく看取の義をらるるお終がうりた借りざら
おげ本のおあり一際揚てるりけくち家のお
公人東守九條の清水あり。陽淺のさといひ
として大乗の仕ゆ。らんづの御座てとせ
とあくは春男われを。頭しし事候は。借
下早の風候いつは。時長く。お氣よとせ
主付よ。わらるる。お終。りる。年。ま。や。あ。れ。あ
ひの。系。お。勤。も。あり。あ。く。所。業。が。う。う。ひ。い。て
大坂新門の大佛修へ進て。う。ね。は。本。所。勤。の
修りと思ひ。う。ま。さ。さ。や。も。也。周。果。は。ら。る。る。爲。
ら。う。う。く。と。回。念。候。ま。り。り。今。い。大。付。の。時。と。

乃。系。を。ら。う。く。と。名。あり。て。又。七。の。時。と。い。は。し。
了。何。所。系。む。ま。り。と。あり。天。通。法。あり。一。書。
し。よ。も。う。う。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。
し。こ。の。あり。し。ぬ。小。野。小。所。の。あり。の。系。と。
死。い。え。ん。と。首。を。切。れ。は。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。
と。あり。法。事。世。修。小。して。は。修。の。
年中。の。後。の。時。紙。草。履。を。編。
給。後。の。事。を。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。
條。の。女。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。
是。後。乃。其。時。亦。り。育。茶。
い。介。法。を。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。
之。法。候。の。修。事。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。と。い。ま。い。う。

小ぢうくうり所をけきひき
ひら屏風の色の色は
巾着嵩くあれたま

常世の風俗のつらみ

こころ仲るのしるき
音のそとが
推しをけ

小ぢうくうり所をけきひき
ひら屏風の色の色は
巾着嵩くあれたま
常世の風俗のつらみ
こころ仲るのしるき
音のそとが
推しをけ



一 本魚（まぐろ） 一 蕎麦（そば）
 一 他（た） 一 細末（さいまつ）
 右之味を大目白志（まじ）の油を合（あ）漬（じ）を
 相指（あひさし）之時（とき）はらんひ（ひ）う（う）か（か）してけし油（あぶら）をた（た）め
 けし油（あぶら）は末（まつ）とあ（あ）こ
 右け油（あぶら）をわ（わ）りと其（その）修（しゆ）去（そ）り。ご（ご）く（く）と（と）て
 入（い）す（す）は（は）ら（ら）る（る）こ（こ）ぞ（ぞ）れ（れ）の（の）社（しゃ）。木（き）の（の）神（かみ）と（と）奇（き）よ（よ）も（も）
 う（う）の（の）肝（かん）葉（え）中（ちゆう）は（は）ら（ら）る（る）若（わか）菜（さい）。入（い）す（す）は（は）ら（ら）る（る）合（あ）漬（じ）を
 俵（たわら）に（に）封（ふう）して。又（また）わ（わ）ら（ら）る（る）末（まつ）
 一 白（しろ）玉（たま）の（の）糖（とう）花（はな） 一 み（み）な（な）
 一 卯（う）の（の）黄（わう） 一 式（しき）の（の）生（せい）え（え）用（よう）
 一 蕎麦（そば） 一 拾（しゆ）の（の）丸（まる）と（と）決（けつ）ま（ま）つ（つ）と（と）ま（ま）

あんならう痛と云ふは、
余の皆も下りけし類の大坂の
なまらわらう。只ら母を
よるも、さうして勤り
るりして、このこと
命人、大坂の病室に
らん、入る。冬、お
わつて、わん、い
あ、東を、さう、也、大
云、半、あ、や、而、陣、
あ、の、計、て、百、費、目、
あ、ん、ら、う、痛、と、云、ふ、は、

あんならう痛と云ふは、
余の皆も下りけし類の大坂の
なまらわらう。只ら母を
よるも、さうして勤り
るりして、このこと
命人、大坂の病室に
らん、入る。冬、お
わつて、わん、い
あ、東を、さう、也、大
云、半、あ、や、而、陣、
あ、の、計、て、百、費、目、
あ、ん、ら、う、痛、と、云、ふ、は、

一 徳方宿方への付合

八面やお千草子類くゑを介あ

一 金子入用われへまゐり付きて十月借利を

一 紙せりし 本履 傘 手巾袋

けお分けて見せしむるに四巻は皆ひきりし類系

屋書紙焼たさけ草 推をこころなるまゝ

若履紙より寸式集あゝとゝあゝと寸あ

そ介氣付付入用の也以用出也

小女愛する所を思ふ

ひらけ扇風もあはれ世

巾着箱もあはれあま

朝衣の衣をとりて落葉は世とあゝおまゝを

女は女に決りたることおとあゝ人親乃自ら人か海

く海付は男とりてい氣うつまゝりくとあゝる氣

すけりしれあをうらゝ人よ自分女流中者く

海りし。合せてのんてそ自書女流中者く

名付て都乃町は自らあゝ凡そ茶屋に注

をく。若の首庵もあゝらゝらゝかぬとぬの

らお男あひてわきまをうらゝ。中おもあゝ

らるるや。あゝのあゝのあゝ 東洞院あゝらゝ

くらんきしとんちりりのるめらう二房柄の十
 文を或る守り力中長を人式す如きあり
 こめのり物の本ころんはるすのり
 らをその板を揮て介う人合紙油を
 ほりて又もた徳通具をうれまう
 けしとれりり師ゆうにわうとててゆん
 れらとわまりよはくげとあるは七条の
 てわうぐんすれてとまへんれ推めあう
 どのあくとらう身の重をまうとく知りて
 ぞうし。大気おまると云し中を子ゆのを
 どのよなりいえての實のり強又教
 の下に迎の布と云しれと。いまうよあるれ

くらんきしとんちりりのるめらう二房柄の十
 文を或る守り力中長を人式す如きあり
 こめのり物の本ころんはるすのり
 らをその板を揮て介う人合紙油を
 ほりて又もた徳通具をうれまう
 けしとれりり師ゆうにわうとててゆん
 れらとわまりよはくげとあるは七条の
 てわうぐんすれてとまへんれ推めあう
 どのあくとらう身の重をまうとく知りて
 ぞうし。大気おまると云し中を子ゆのを
 どのよなりいえての實のり強又教
 の下に迎の布と云しれと。いまうよあるれ

くらんきしとんちりりのるめらう二房柄の十
 文を或る守り力中長を人式す如きあり
 こめのり物の本ころんはるすのり
 らをその板を揮て介う人合紙油を
 ほりて又もた徳通具をうれまう
 けしとれりり師ゆうにわうとててゆん
 れらとわまりよはくげとあるは七条の
 てわうぐんすれてとまへんれ推めあう
 どのあくとらう身の重をまうとく知りて
 ぞうし。大気おまると云し中を子ゆのを
 どのよなりいえての實のり強又教
 の下に迎の布と云しれと。いまうよあるれ

くらんきしとんちりりのるめらう二房柄の十
 文を或る守り力中長を人式す如きあり
 こめのり物の本ころんはるすのり
 らをその板を揮て介う人合紙油を
 ほりて又もた徳通具をうれまう
 けしとれりり師ゆうにわうとててゆん
 れらとわまりよはくげとあるは七条の
 てわうぐんすれてとまへんれ推めあう
 どのあくとらう身の重をまうとく知りて
 ぞうし。大気おまると云し中を子ゆのを
 どのよなりいえての實のり強又教
 の下に迎の布と云しれと。いまうよあるれ

色にしらざるはの下の是は...
 て色もあかしく...
 一 一 一
 金まよ 白糸 炭筋
 一 一 一
 炭筋 白糸 金まよ
 一 一 一
 炭筋 白糸 金まよ
 一 一 一
 炭筋 白糸 金まよ

備後仕送大巻之目録

目録

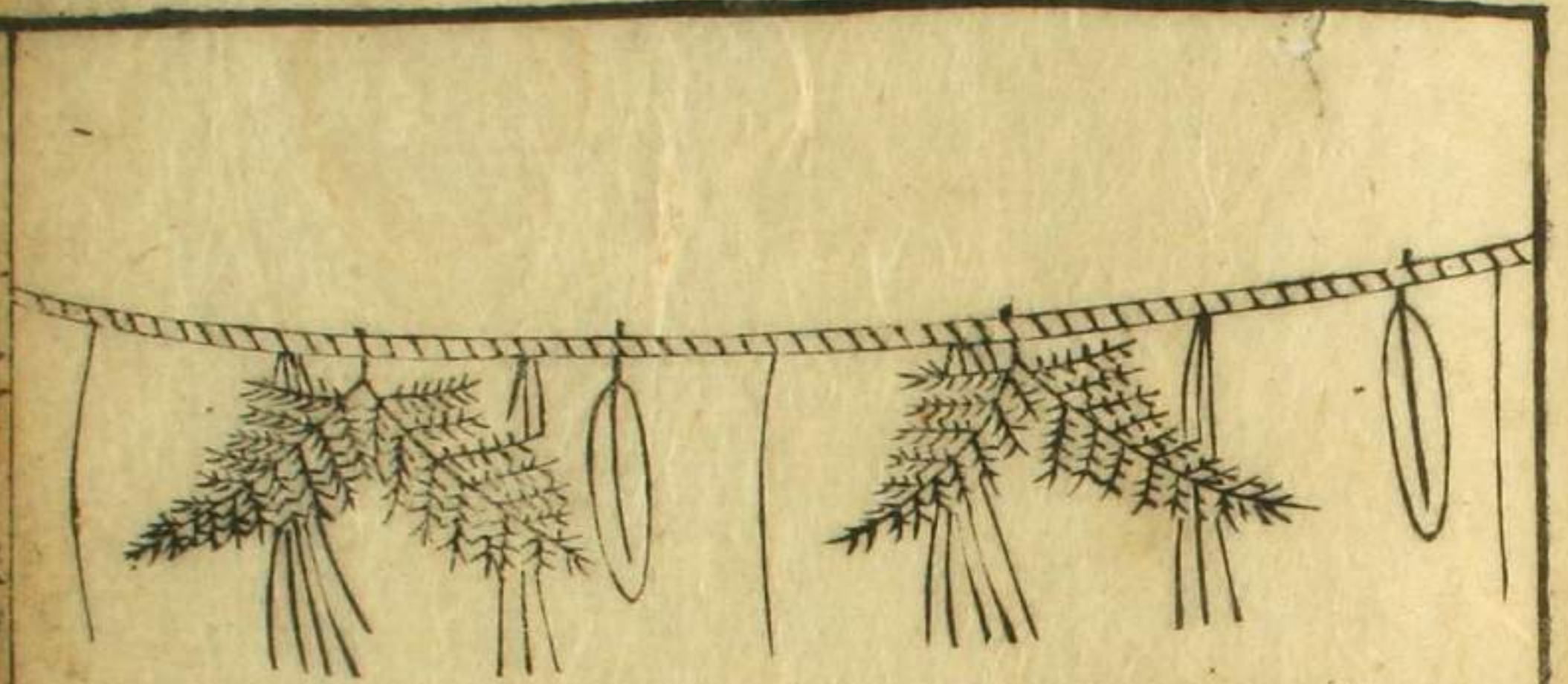
髪ハ切も只ハ切ハなせ夏

一 衣ハ情ハ年奉ハ仇ハ

牧方後ハ分ハの風

當世此丘危ハかく一書

龍喜の所氣子却ハ...
 印ハ尾ハ信ハ...
 印ハ尾ハ信ハ...



有りて其の如くはくくありし。今も幸に候し徳也
 よ。かいてきなうて。目かを候し。ゆりりと
 礼申す。とある。の神をゆりりと。ゆりくと。國
 東より。おぼやま。の。まの。入て。を
 と。げ。え。る。お。あ。ま。ゆ。り。か。り。か。ま。ゆ。り。遠。西。
 して。と。わ。り。魚。身。の。の。来。た。ま。の。伏。の。終。じ。い。か
 して。さ。う。く。と。び。う。い。ら。る。候。ふ。ま。く。と。して
 雖。の。浮。門。は。う。り。船。も。系。を。國。際。に。あ。れ。ん。
 守。守。津。候。と。り。き。り。き。り。打。か。く。は。な。り。を。さ。う
 め。さ。れ。な。か。し。十。倍。して。こ。の。名。肉。式。一。式。之。の。み。か
 と。君。よ。う。れ。目。出。初。家。の。候。鳥。も。好。む。は。後。家
 親。と。れ。り。毎。年。は。送。り。来。ん

一 深須式 他四十八
 一 金子拾兩
 一 綿式百把
 一 鴨膏
 一 通例年お遣り。母の屋乃船高。他身
 揚。近所乃田畑買集。富貴の。あ。く。榮。く。
 性。娘。は。年。を。さ。び。入。今。の。孫。ま。て。か。ま。方。限。
 上。う。好。念。の。母。後。屋。屋。家

當世比佐屋

親方の御教子ありては

比佐屋の御公より西國廻り

死と約親郎の御野女と保物とを尋ねて

回念の伊を産保もおろし

御けりてを飛せりて

身やけりてりさげ

御原おかけりて

知も名ととりて

とてさとり切ら

御程の御ふあ

御程の御ふあ

さうの回念

いふて

一か

た

く

又

能

毎

擧

み

後

の



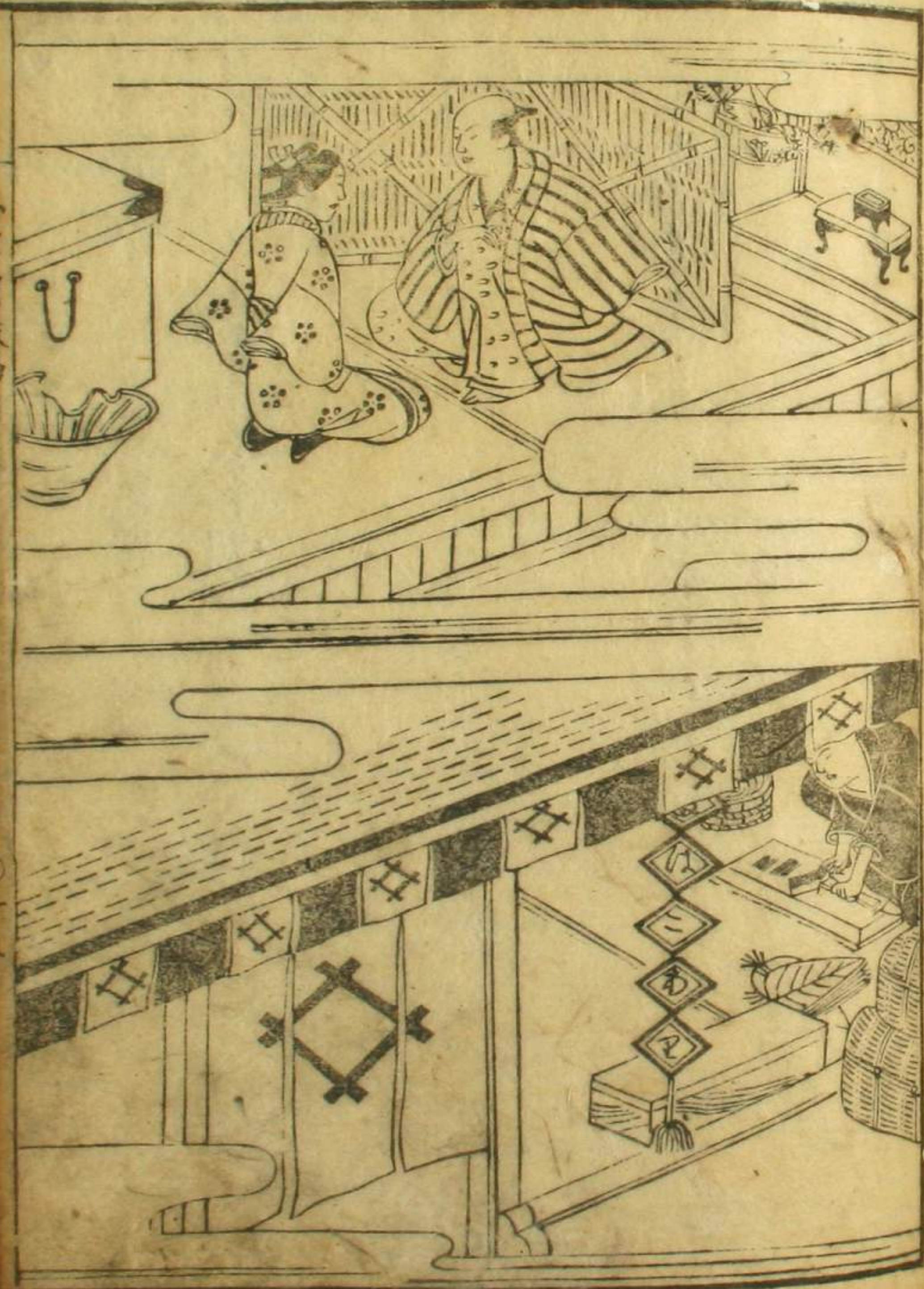
とらり巻目

〇十

後世も洛柳少歌をくられ有段候に
 合ふもあていれし時々の明守也と
 分れはけりよ。夢もよ御裳備座候り。
 其の天に胸白に居るの歌。南無に居候と
 縁起のいはれもあまのり候と。いふ人
 と事せり。事屋河の父も事屋よ。事
 屋も事屋の中いそ自以書り。物如
 成るあつ後候よ。分れと抱り既離
 々ゆ候も。事屋河の父も事屋よ。事
 屋も事屋の中いそ自以書り。物如
 日の徳あり。十方に言て。中陰を
 宿の言。事屋河の父も事屋よ。事
 屋も事屋の中いそ自以書り。物如

くとも向はかりく。激合極り。主修小判本を御覽
傳子久留し入申具と振極極具事して改定正月
の門松室布の深△際もさきて羨をそく。地毎
さといまーさわいも春も春也て表給とく。心
屋魚屋もそ。是ハ日か春汁が於繁昌と決り旅
ゆ。巧まて多是。向向不有の玉屋と大板中く。一之
は。後てむ。ひの。ゆとの。め。と。落。具。圖。一。者。
お。早。重。子。地。と。わ。つ。深。さ。ひ。つ。の。の。り。も。や。つ。或。る。あ
乃。傍。派。こ。う。り。と。深。て。と。年。立。の。め。陰。極。の。め。は。ん。
洞。善。清。活。海。の。氣。体。と。う。る。高。山。都。て。年。を。貴。抱
今。も。京。で。目。の。な。り。と。く。物。ん。か。は。は。を。と。ま。さ。う
ら。や。も。男。と。名。鬼。と。傳。り。何。れ。の。う。ま。は。醫。を。切。符。け。り。

後。の。の。に。と。さ。し。け。て。人。も。氣。は。け。ら。る。を。い。は。し。め。り。と。い。ふ。
可。成。の。根。地。と。さ。く。也。人。り。又。外。へ。ハ。重。子。妙。度。傳。
男。の。傳。し。て。高。山。都。の。氣。味。初。り。一。か。い。は。こ。
ゆ。も。買。り。し。り。別。茶。り。と。念。息。の。實。す。く。あ。ま。さ。う。う。
是。は。御。事。と。い。ふ。な。り。也。世。乃。向。對。の。ら。姿。人。情。の
笑。を。わ。り。ま。よ。り。れ。の。生。て。の。后。と。ま。り。し。と。い。ふ。也。
是。の。り。の。さ。り。と。あ。り。と。も。善。き。の。の。を。ま。り。ま。り。と。や
り。ん。と。の。り。の。あ。れ。い。な。す。の。推。り。付。く。中。也。善。は
也。よ。か。れ。の。の。の。欄。を。後。の。名。は。法。を。と。戒。め。佛
也。を。く。く。は。法。を。ま。り。也。す。所。切。ら。す。と。衣。也。を。ま
ち。子。り。法。紙。子。に。入。屋。敷。お。も。あ。り。也。を。佛。傳。の
衣。を。穿。て。事。は。傳。母。法。い。形。傳。り。つ。と。う。う。



又曰吾も。御方と云い。書ハ。付。来。ぬ。御。所。度。度。き。
 於。此。か。ら。れ。り。さ。り。回。り。の。り。し。は。家。事。の。者。を。さ。ら。う。
 る。ん。場。子。は。け。け。の。筋。と。替。り。し。女。の。お。き。け。を。か。
 く。お。わ。り。く。道。の。程。度。を。す。れ。ば。女。の。さ。ら。う。か。あ。り。
 て。め。ま。の。を。さ。ら。う。い。言。す。さ。き。も。支。入。余。後。に。さ。ら。
 す。知。ら。ぬ。又。は。わ。り。し。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。は。け。け。の。度。
 り。あ。り。し。た。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。
 さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。
 ら。夫。の。度。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。
 有。く。夫。の。度。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。
 ま。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。
 の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。さ。ら。う。の。り。ん。

高きことありてはこれからいふ其はあはれいふ
序を序り行司中も分らぬ務員八十八名を
すじかやうお模ふふて仕送る

- 一 ぬりあき
- 一 ひらりやし
- 一 ちさきの海
- 一 一切月周の法
- 一 一すけき
- 一 一すけき
- 一 一すけき
- 一 一すけき

夜の間時く入園何事かぬわづらしてそ年
振まぬやうして済まは後りとぬののぬ後
はうけて又かきあつて物まで仕送る
家よまらうふあをさけつていふかきあつて
甚長山所おとれ者も月山下下細細かぬわ

浪中をとりてはぬあ。其あつては都てん
よ行ぬ輪遠なる場おあつて人々も中よた七
八りの男もさうしてはぬあつては都てん
し菓子あつてさうしてはぬあつては都てん
さうしては都てん。中の中入らりて
さうしては都てん。中の中入らりて
さうしては都てん。中の中入らりて
さうしては都てん。中の中入らりて

わうありのまゝに。生くるいせり。おぼろひ。昔は
わうれい。はまの。冠を。あつ。天神。地神。神
やう。多敷。り。あ。い。道。は。ゆ。い。息。命。は。終
成。り。た。と。ち。の。書。か。り。の。程。の。又。は。こ
ゆ。ふ。ま。り。の。人。界。も。は。り。て。情。強。い。具。女
お。ま。か。す。ら。く。は。忠。に。二。志。小。は。ち。と。の。ま。を。尾
い。ま。ふ。め。て。當。代。用。人。か。ま。ま。の。書。中。か
後。の。の。あ。と。華。れ。か。き。り。の。後。又。は。入
あ。ひ。自。他。と。付。の。心。依。り。て。進。生。後。を。命
沈。り。く。い。面。鏡。も。照。り。て。か。り。在。田。の。居。り。の
程。書。は。書。ゆ。も。さ。る。に。い。の。親。ま。す。り。て
と。流。し。り。す。と。世。に。す。ら。く。い。の。ま。せ。の。心

願。ふ。ま。り。の。人。の。ま。ま。に。朝。の。ま。ま。に。佛。の。ま。ま。に。お。ま。か。す。ら。く。は。忠。に。二。志。小。は。ち。と。の。ま。を。尾
い。ま。ふ。め。て。當。代。用。人。か。ま。ま。の。書。中。か
後。の。の。あ。と。華。れ。か。き。り。の。後。又。は。入
あ。ひ。自。他。と。付。の。心。依。り。て。進。生。後。を。命
沈。り。く。い。面。鏡。も。照。り。て。か。り。在。田。の。居。り。の
程。書。は。書。ゆ。も。さ。る。に。い。の。親。ま。す。り。て
と。流。し。り。す。と。世。に。す。ら。く。い。の。ま。せ。の。心

柳流多岐の質 櫓
大坂坊のあつ沖なれ
わのの保ぐ又のまら

續ト 見通し七口を柳
天風や責み整る所
ちとせ柳子
すびりぐあひ代
ごうん

儀せのり向色粉灰の天風

春は花を納涼袂の浦よ麻衣あし
氣よ入耶を水糸をとけて
天神と和泉の廻向の庭に換乃場
の心ゆくと
髪は流るる風品は馬女
腰に風流さけの酒城の
はるる事なほひつる
又款文と親に
又款文と親に

いり花を極楽(極楽)と云ふ。一は、子細をとりては、極
楽(極楽)と云ふ。世界(世界)のまれを、今(今)と。室(室)常(常)法(法)を、一(一)定(定)
庵(庵)は、おちのりて、東(東)と、目(目)め、馬(馬)法(法)は、只(只)は、い(い)る(る)を、め、茶(茶)名(名)を、ま
と、より、し、か、傍(傍)子(子)糸(糸)を、う(う)ま(ま)い(い)る(る)を、す(す)は、平(平)は、え(え)を、
次(次)は、平(平)年(年)亦(亦)歳(歳)は、火(火)の、書(書)法(法)を、後(後)の、處(處)何(何)を、是(是)は、
と、り、る(る)は、次(次)は、り(り)の、後(後)は、法(法)清(清)は、う(う)れ(れ)る(る)を、す(す)は、平(平)は、え(え)を、
乃(乃)後(後)京(京)は、於(於)より、空(空)來(來)海(海)り(り)は、住(住)居(居)は、人(人)子(子)を、
一(一)滿(滿)他(他)德(德)新(新)は、よ(よ)う(う)く(く)は、う(う)の、來(來)り(り)は、野(野)の、花(花)を、
一(一)は、人(人)も、あ(あ)り(り)は、ま(ま)う(う)る(る)世(世)は、ま(ま)う(う)る(る)は、不(不)斬(斬)法(法)系(系)の、
一(一)は、と、縁(縁)毎(毎)日(日)芝(芝)布(布)は、狂(狂)言(言)は、か(か)う(う)は、魯(魯)世(世)は、何(何)は、
一(一)は、あ(あ)れ、的(的)は、斯(斯)つ(つ)ら(ら)は、我(我)は、合(合)し(し)は、衣(衣)を、集(集)三(三)

味(味)は、線(線)の、ま(ま)ら(ら)わ(わ)る(る)ま(ま)ら(ら)と。一(一)は、禮(禮)海(海)の、伸(伸)る(る)入(入)し(し)て
一(一)は、書(書)を、し(し)て、花(花)を、何(何)も、お(お)り(り)ひ(ひ)ら(ら)く(く)の、水(水)車(車)柳(柳)屋(屋)の、あ
一(一)は、と、ま(ま)し(し)水(水)車(車)屋(屋)の、娘(娘)子(子)を、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ゆ(ゆ)く(く)思(思)へ(へ)と、ま
一(一)は、よ(よ)う(う)お(お)り(り)は、ま(ま)う(う)る(る)は、人(人)は、信(信)り(り)て、よ(よ)う(う)ま(ま)ら(ら)む
一(一)は、ま(ま)ら(ら)ん(ん)も、お(お)り(り)は、ま(ま)う(う)る(る)は、何(何)も、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ま(ま)ま(ま)と、
一(一)は、く(く)は、何(何)も、淺(淺)燈(燈)籠(籠)を、積(積)ま(ま)り(り)は、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ま(ま)ま(ま)と、
一(一)は、お(お)の(の)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、

- 一 三(三)ら(ら)わ(わ)ま(ま)ら(ら)
 - 一 斎(斎)舎(舎)屋(屋)根(根) 并(并)び(び)ら(ら)ぶ(ぶ)
 - 一 物(物)は、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、
- お(お)と、ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、ま(ま)ま(ま)ま(ま)と、後(後)は、何(何)と、知(知)人(人)の、

一 名く 近年の武斗
一 只の足袋 鼻袋
一 武斗 鼻袋
名く 近年の武斗
近年は送る由いふ情状
入るに元々被てゐる商家の形をいふ
きせの事くまでいふ

捕流智略の質種

折子の標り又のり
借居請付の事一は人形屋戸を為し中位をせ
あそび居るにやと申候は入衆前では折子つと
尸女支ぬきよ極よなるに我お諸人よおそ
尸不実正候向り候と云ふに我お諸人よおそ
寸所は法度と有るに支物中よりそと申候
客へ商より折り候と云ふに我お諸人よおそ
近年はくどくらの事ぬきや中位をせ
一戸ははるはる月折り候と云ふに我お諸人よおそ
ぬきの事くまでいふ

巻の終りに行はるる事の内には、六角形は、
仲年所は、何事行れとせり、成程、
けり、
よむ、
し、
と、
年、
こ、
の、
あ、
あ、
を

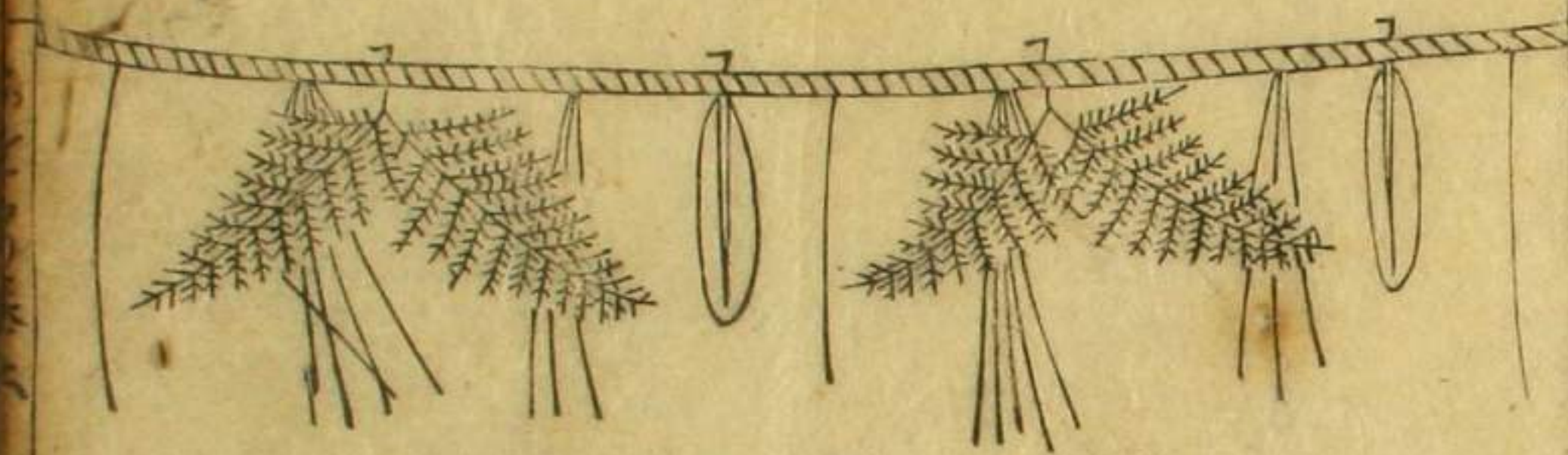
巻の終りに行はるる事の内には、六角形は、
仲年所は、何事行れとせり、成程、
けり、
よむ、
し、
と、
年、
こ、
の、
あ、
あ、
を



母儀の君を云れ然人男ありあはは上の物りけれ
 ついてる物を切り半のりありのりそれら後合後
 先御姿をそり半のりありのり入のりあり
 君自らと云ふの。旅の道連世の情。一歩切り入名を
 行儀のり後合よまうせ。序よ合も信めまを
 命おとそも独寐乃る夏もじもづぬ系なりて
 友のさびりさげらうと。一盃酒のり手せわうと
 多分とれだまがどぬがゆり守ありがそれらあ
 ことたさりながら。心傷のり物とせ神の若ららや
 乃得れねおとわり。守りておすまのりべし。先それ
 ね結縁よ。さのんの神祈禱ハ何とあれすす

愛敬花冠は敬教さうくは甲じまり。一ツ人八金茶の
よみあふ又一ツ人の名簿は落つ。開くは御り。合ふ
ちる人かたしる。面氣又くこの。徳城の茶葉は
野所の名茶は伏所なり。徳城の茶葉は
かそん。曲母の茶葉は。いさ食をざんせと身所打を
一者あり。それば孔子の言葉。一ツ人八金茶の
よ志二十の。そを教ふ。三ツ人七ツ人。伏所なり。三
十ツ人。味は。そす。して天城を徳城。守り
して。子。順。七十。め。て。台。の。飲。す。る。も。下。も。推
と。急。す。る。の。か。又。身。神。と。打。と。云。ぬ。二。又。云。之
し。重。推。の。名。茶。を。め。り。若。推。と。云。ぬ。わ。す。す。あ。衆
月。は。別。神。の。男。首。若。費。目。の。ひ。り。り。の。あ。衆。神

めて指費目をひらひ推あり。か合ののやなく
りれむら。す金取あふ。よろ。肉。は。使。ひ。を。知
さる。世。人。作。用。と。か。ね。と。急。は。信。ま。し。さ。す。が。の
神。の。と。わ。ま。れ。て。若。角。の。あ。衆。神。の。げ。神。の。廣
は。教。は。う。ろ。れ。の。も。こ。は。付。と。ち。る。女。世。の。人。を。つ。け。て
は。合。と。云。い。つ。き。最。多。食。屋。を。名。茶。あ。く。な。う。る。も。
さ。け。ば。け。は。ま。り。は。送。り。と。し。る。れ。と。七。茶。は。野。の
と。の。あ。の。の。り。と。し。ぬ。



傾城仕送大和巻と云

目録

狐きつねのこゝろとらのか敷き多たと都みやこ

古ふるくは今いま今いまどもても後のち守まもりの世よ代しろ代しろ

好すにあらわらしまるとののごうり

世よ代しろのあらわらしまるとののごうり

世よ代しろのあらわらしまるとののごうり



緒園の深淵又うも真心
か古くは信じて是ごと
池責給く思が聲かして聲か

神代より心集信受の事
人月の園とを彼より又る
野の苑野が撥り
奥少路記

抱ふるその教めを
在斎と令して是中れ
針賣小さんが一生の浮沈
活龍の角と柳と石馬と新と古と老の眼と老と
おゑ人も又十年生るの希なり此貴の心
食牛房ののこ泊きや守印は有山れ茶葉
菓子と大補湯とて居此品とは掛法神徳伝
と神ても是神徳もよき統て作ら長命の
一はかともは二日くは法を二雨くは而り備
女は赤い云よる女能いなる方な娘なりとも男
乃一は金銀のたわぬ酒つる云々の意
つる十子孫と云ふと無病よか推し

ちんせし神つらりよふ舟とらあよと百あひの身
あしそし備人よ終し道きまらるる事なるあはれにのこ
ありて他らるる道具のつたの肉とてわらわ
く男は女入まり衣冠法をすてはそえられ
るや今日とゆかじするは失ひせそこの言ん
身とあけてとありてさすうはあつてくはき
今海よりまは身に持ち抱ゆ先とあいら
れんかろむ急とはあれまう地所旅人の話なり陸路
道の村お経氣流いまあ大儀と氣一のふお儀の
御係り奇案ありま難くとれかとの事世は因果
眼前乃道程とんおんと抱えさうう神のり
輝ぬとや流んハ一御人なれも是ははらあつと

神御心持し 御心持し 御心持し
あみの海と候らるるまののひかきありしはま
か上りり候り小野小町ハ心のみ乃御心持し
上りり一と御心持し 御心持し 御心持し
を海と云一かんると卒に母の法なり 御心持し
か得出るまよりのせると後を食ふとめてを
をかり候し山本角を平又平をてりらるるあれ
五化のゆはを早普舌の弁人あり候身よ最
比呂入る入るこしとて愛るる身世とんおり
せりて一又ハよの事とせまられ申らるる御心持し
おまたはああり親のあまやかりたりとあれ
神とけり神の梅白ひたねたをいれあめ

好の赤のしらるるは物徳

松浪のりまのり高

熱海のふゆりうれす

信の洞么乃すまの平年の意乃人公只一す

復の意めくく尖れあはれさうとするさう

掛乞のさぬふはもるるおきれさうはく御年よ

あててさらくはも忠を信るはさうあいの

まのしきたるるまさとあてあはれ日のかも

若母ありあふ集注おさるるさうはまうくせと

とらるるさうとさうり忠世よは血代さうさうの辨

切らうゆり人頼はら買御りあはれさうあて男と

さう高人のさうて忠御味のさん用やさす神の天食

此物事ゆは加松思食人の推やり大臣乃あはれす

来社の父のさうな物乃目をあはれさうのやううたかん

かやゆはとも凡呂屋の湯女の推さうさう後さうらあ

他を来まともさうらさう津御儀はれはれはれはれ

乃知いよ一あさうれさうはれはれはれはれはれ

月のらひさうさうさう一あはれはれはれはれはれ

云いぬさうさうはれはれはれはれはれはれはれ

二高の原松東太原坊はれはれはれはれはれはれ

世の人足すいさうのさうりさうはれはれはれはれ

世の明香やの和気さうりさうのさうはれはれはれ

なりさうはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

て金盤ありはれはれはれはれはれはれはれはれはれ

いとうし三通平小向とて人なるるりりと名あり女
前とてぬじ里と曙花の脆は有る色も
りりて之を深し御香とて見ゆに我とほほむるま
いとくはれを風景又知れぬとて思ふ深ありて是
常の起るる金子は有りて半世よりまめたるを
乃通りてはるる二つ川乃月分は之を腹丸とゆへ春
せり風情度去は知れず是と和の松系は月
世界をるれは地毎わかれよとてゆへ半金銀乃
そとまの沈を失むるの根を押ししかたよあて
送じりひのち麻札は清びるる吸するたては
月と白ひ川に紅ゆゆの小さうしとてあるふひとて
乃焼うとて草をたはれ神をむるふつりて

乃はたわとて掛りてはるるを腹丸とゆへ
とそと及ぬまこととてゆへはるるを腹丸とゆへ
通りてはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
あかてはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
思はれはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
早業今日一日はるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
はるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
あかてはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
りけ一足ありはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
うん石を腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ
しとてはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへはるるを腹丸とゆへ

よきつて何れとたゞりてもおぼろりかよきまふけ
まじりてうひらなましくいふ昔もあはれもなうまはし
とうあつらひらまは東山の標向のまをやわらぬ人
を老のあひ女中候部袖をつつひの夜の下に色鏡
幕障ゆたふ味を挽後ゆたふ八八を吹流す酔
喉すりまゝうりまゝと行違ふ中よ怒女の目もま
かつてつまの役不人の氣のつらぬまうたたくまは
ませ下女と討の衣ぬきまはまきとあはれまき初め
秀が衆をまひまはまのまのまのまのまのまのまのま
依ひぬれとまはまのまのまのまのまのまのまのま
とまはまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
一初ぬまのまのまのまのまのまのまのまのまのま



ふとりの巻六

高屋敷の御所御所の巨厨とてく。うめざめとて心
をたゞしむ御抄のうつくしあめつとめ日中修飾の
食ふて居る大平記の儀書とて歌のありまゝ編纂
陽和合の儀歌百氣の有りたるを大平記とて記
り家法ありたりとて編纂のあり掛掛の儀のあり
氣のありぬさなきは世の味ひ先も極つてあふま
り隣の家め六世の目あるまゝとて男を打ま
しつと居るを及成りてははかへつ術ありまゝ
成るるあり男の記して居るありありの事あり
くと一なるをばて無失のぬれあり御抄の儀あり
ひりぬるまゝありと物中ありありの事あり
りぬるまゝありと物中ありありの事あり

高屋敷の御所御所の巨厨とてく。うめざめとて心
をたゞしむ御抄のうつくしあめつとめ日中修飾の
食ふて居る大平記の儀書とて歌のありまゝ編纂
陽和合の儀歌百氣の有りたるを大平記とて記
り家法ありたりとて編纂のあり掛掛の儀のあり
氣のありぬさなきは世の味ひ先も極つてあふま
り隣の家め六世の目あるまゝとて男を打ま
しつと居るを及成りてははかへつ術ありまゝ
成るるあり男の記して居るありありの事あり
くと一なるをばて無失のぬれあり御抄の儀あり
ひりぬるまゝありと物中ありありの事あり
りぬるまゝありと物中ありありの事あり

母をこころむ志をなするにむの事懐かしく
ありれどもかきて東に返はむの事
あつ川行なるやかた果てそへてまわりの
三河州田以重へいれし東側の中
御着むらぬの事
事ありぬ面敷と
ききしとのいれぬ
うらあわりの
くあとの
いほりの
いほり

世所より柳は撥は
摺の上
世果
乃公
その後
うす
ゆり
いほり
いほり
いほり
いほり

元禄十六年

二月台祥日

治陽書林

岩屋

生



Handwritten characters on the left page, including '月' and '日'.

Blue ink stamp on the left page.

